

編集後記

医師会では、若手医師の医師会加入がよく話題に上っている。特に、日本医師会では医師全体の入会率が51%まで下がってきており、危機感を持って入会キャンペーンを繰り返している。

実際、山口県の医師会への入会状況は、都市医師会や県医師会では全国平均以上ではあるものの、日本医師会への入会は全国平均を下回っている。

そうした中、県医師会では若手医師の医師会加入促進の参考にすべく、勤務医部会において講演会（令和5年2月19日）を開催し、一定の成果を出している京都府医師会の取り組みについて話を聞くことができた。

特徴的なのは、京都府医師会による若手医師ワーキンググループの立ち上げであり、「若手医師のための研修と交流会」として、ベテラン指導医から研修医まで屋根瓦方式で教育のための「塾」を開催されている点である。とにかく、「教育」が前面に出ているということである。

講演の中で印象に残っているポイントとしては、「まず、与えなければ誰もついてこない時代と認識する」。そのうえで、「教育をきっかけ（入口）として、若手医師を医師会につなげていく」ということである。「教育」は若手医師が医師会につながるチャンネルである！というのである（この考えは山口県への若手医師定着にもつながる！？）。

確かに、若手医師にとって一番の関心事は、医師として必要な知識や腕を身に付けること、そして、情報や悩みを若手医師同士で共有できること、であるのは理解できる。そういった意味では大変共感できる内容であった。

ただ、そうした「教育と交流」をキーワードに取り組むためには、大変な熱意と根気が必要であり、講師の先生の意気込みには感服させられたのである。そして、こうしたことは「人」によるところが大きいのかな・・・とも思うのである。

そうなると、私のような昭和世代ではなく・・・若手医師を中心に、臨床に役立つ知識や情報を絶えず発信できる人材を発掘し（地域ごとに人材はいるはず！！）、医師会に参加してもらうことが一番の近道なのかもしれない。

県医師会でも、「若手医師に対する」取り組みはあるが、一步進めて「若手医師による」ワーキンググループ等により、継続的に取り組めるよう人材を発掘・組織化していくことから始める必要があるのでは・・・と考えるのである。

（理事 岡 紳爾）